

會 務

第 21 卷 第 10 號 昭和 10 年 10 月

役 員 會

第 8 回役員會 (昭 10・9・16)

出席者：青山會長、草間、平井兩副會長、小野、金森、佐藤、鈴木、藤井、古川、堀越、山田各常議員、眞田前會長

決議並に報告事項

(1) 東亞部(東洋部を東亞部と改稱す)部長に副會長平井喜久松君を、次長に常議員内田莊一君、鈴木雅次君を選任せり。

(2) 8 月分入退會は理事會に於て(役員會は理事に一任を決議)緒方虎之助君外 18 名を會員に青柳進君外 83 名を准員に三谷純義君を學生員に入會を承認し、松松慶次君外 1 名を准員より會員に石井田宥一君外 1 名を學生員より准員に轉格を承認せり。

(3) 服部祖公會へ明治以前日本土木史編纂補助を明年度に於て更に申請することとせり。

(4) 振興委員會第 2 部並に第 3 部會にて決定せる振興案に關しては調査研究の上更に役員會に諮ることとす。

(5) 第 21 回秋季視察旅行は 10 月 27、28 の兩日に涉り愛知縣蒲郡を中心とする國道並に橋梁の視察旅行を開催することとす。

(6) 9 月分入退會の件

梅村喜三郎君外 8 名を會員に安部忠孝君外 43 名を准員に郡司次夫君外 5 名を學生員に入會を承認し、星治雄君を准員より會員に小野早苗君外 1 名を學生員より准員に轉格を承認せり。

編輯委員會

第 10 回編輯委員會 (昭 10・10・7)

出席者：藤井編輯長、岡田、永田、野口、藤田の各委員

協 議 事 項

(1) 第 21 卷第 9 號所載論說報告に對する討議依順先を決定し、同上所載の論說報告其の他に對する謝禮を決定せり。

(2) 第 21 卷第 10 號に下記原稿の追加登載を決定せり。

業 報：東北地方國鐵水害概況、東海道本線蒲原由比間浪害狀況(以上鐵道省工務局保線課)、省線利根川橋梁の浸水(會、工、岡部二郎君)、東洋工業會議に就て、利根川流域に於ける水害狀況を聴く座談會記事

抄 録：土の支持力試験に就て(傍島)、沼澤に於ける橋の荷重を減ずる鉄拱(傍島)、回轉式潛函基礎設置法(傍島)、Colorado 河水道に於けるサイホンの設計(米屋)、第 2 San Gabriel 堰堤の木材遮水板(米屋)、Manning 並 Lacey 公式と Kutter 公式の比較(米屋)、地盤の支持力と變形抵抗(瀧山)、Weser 河橋梁架換工事(糸川)、壓氣式測定器による地盤支持力(糸川)、銜接鉄桁の細部構造に關する重要問題(奥田)、Kleine Bell 橋の基礎工事に就て(傍島)、コンクリート隧道に使用せる舊式連續混合機(傍島)、特殊保安設備(對風信號機)(内山)、土塊の最高堅硬度の含水量の測定(香坂)、棚附植莖の原理と應用方法(瀧山)、San Francisco Bay Bridge の斜脚塔(奥田)、偏心懸垂を受けた鋼柱の耐荷力の近似計算(奥田)、Chicago 川に於ける下水隧道(玉置)、Chicago 青粘土に於ける下水隧道の開掘(玉置)、洪水の檢測と調節を目的とする雪の測量(小林)、ポーランドで行つた橋梁補強(古藤)、水窪田の一直鐵欠板切工(古藤)、コンクリート梁堤の修理(古藤)、新設計の鐵筋コンクリート橋(古藤)。

(3) 第 21 卷第 10 號登載原稿を下記の通り決定せり。
論說報告：利水上より見たる琵琶湖の調節(會、工、山内喜之助)、新京吉林間國道工事報告(會、工、米田正文)、方塊構造物の安定度に就て(會、工、工藤大夫)、鐵管接合材料に就ての一考察(准、木島 繁)

討 議：長崎港築築工事報告(會、工、嶋野貞一)、河(著、會、工、三好貞七)、測水器の改良に關する一考察(會、工、林 猛雄)、河(著、會、工、安東 功)

業 報：走行自動車に因る道路橋衝擊試驗(會、工、小澤久太郎)、來見野發電小路工事概要(會、工、高本健吉)、滿洲國々道局の機構(會、工、米田正文)

抄 録：流速分布を考慮せる時の流水の諸條件(本間)、下水の機械總論(松見)、來年完成せる San Francisco Oakland Bay Bridge (奥田)、附屬木床に關する實驗(奥田)、T 字頭起重機に依る Bay Bridge 鋼塔の建設(奥田)、New York 港風儀の薄殼コンクリートドーム(奥田)、ベルギーのフイレンダール橋梁

(奥田), 金屬の creep limit に就て (最上), Chicago 下水隧道に於けるコンクリートの打方 (玉置), Niederflur 運河昇降機の鋼構造 (米谷), Niederflur 運河昇降機の扉に就て (小林), 開門の水理 (米屋), コンクリートの強度並密度に及ぼす混和剤の影響 (米屋), Boston 海岸道路の新橋梁 (長瀬), 縮縫による安價な舗装養生 (長瀬), Breslau, Universität 橋梁の改築 (奥田), 鐵筋コンクリート版橋と T 桁橋との比較 (福田), 破壊状態を基準とした鐵筋コンクリート梁の新計算法 (福田), 世界各國の最近の橋梁 (福田)

特許紹介: 5 件及登録實用新案 18 件

土木學會振興委員會

第 3 部會第 6 回委員會 (昭 10・0・0)

出席者: 野坂委員長, 太田尾, 鶴岡, 南保, 原田各委員, 奥田秋夫君, 小野寺康勝主任, 五十嵐桐舞主任

協 議 事 項

(1) 土木學會誌分冊發刊に就き慎重審議を重ね次記の通り全會一致を以て之を決定し役員會に提案することす。

土木學會誌改革に関する提案

土木學會を振興せしめるには土木學會をして從來の如く土木學(特に學術技術)の進歩を同らしめると共に新に協會としての意義を自覺して土木技術界を正しく指導し土木事業の發展を同らしめなければならない。

此の目的のためには學會は先づ會誌の内容體裁を改革して比較的地方に散在する多數の土木技術者に呼びかけ出来る多くの會員を獲得して學會の振興發展を圖るべきである。

即ち會誌の内容は論說報告に當ふに及ばず、從來誌上に掲載の機會なきを遺憾としてゐる簡單なる研究の報告又は長期に亘る調査研究の一次的報告、大小諸工事、計畫設計、施工の紹介並に運賃等を掲載すると共に時論、講演、講座等の欄を設けて土木學會の指導方針を明らかにし一般技術者の素質向上啓蒙に資することを努むべきである。而て學會の事業計畫並に本部の動勢に細大となく之を誌上に發表して一般讀者の意見にも問ひ、會員は凡て會誌を通じて土木學會の現状を理解し、土木技術界の趨勢を識ることが出来ねばならぬ。之振興委員會第 8 部會に於て先づ會誌改革の件を取上げ鋭意之を評議した理由である。

而て多數の新會員を獲得して所期の目的を遂行するためには會誌の内容は從來より遙に多岐多方面に亘つて内容を豊富にし會員一般をして會誌を通じて學會に興味心を懷かすの事業を遂行して行かなければならない。従つて之がためには會誌は從來より相當大部となることを後期すべきである。

尙又學會本來の目的である土木工學の進歩を圖るには從來の論說報告欄に掲載論文を益々嚴選すると共に多數の比較的簡易にして興味ある記事も裁り且つ又協會としての土木學會の機關誌たる内容をも盛り込まなければならない。

斯く考へ來るとき、從來の會誌の體裁は上記の目的を充分遂行するに遠ざかるべしと考へ、茲に純學術技術論文のみを掲載する會誌(以下之を土木學會誌第 1 部と呼ぶ)とは別に別冊(以下之を第 2 部と呼ぶ)を發行し、その内容を別紙の如く分類し各冊の特色を明瞭ならしむるを學會今回の振興策遂行上、編輯技術の點からも、携行保存の點からも甚だ便宜なりと思ふ次第である。

土木學會は會誌を表現主體とする故を以て先づ之が内容體裁の改革案として上記方策を提議する。

1. 土木學會誌には學術技術論文のみならず土木に関する社會經濟行政問題に関する論文をも載せること。

2. 土木學會誌を 2 種の冊子に別け第 1 部及び第 2 部とすること。その内容上の如し。

第 1 部: 論說報告(會員の原著に擇るものにして他の刊行物に未發表のもの、但し編輯委員會に於て必要と認めたるものは例外)、討論(同報告の附議)

第 2 部: 時論(土木技術、社會、經濟、行政に関する一般的時評、特に本欄に於て土木學會、一般土木技術界の動向を検討)、講演(學術、技術その他講演速記)、講義(一般學術技術特にその等の新問題に関する解説)、論文(簡單なる研究、長期に亘る調査、研究の一次的報告、大小諸工事の計畫設計、施工の紹介並に運賃)、雜錄(特許抄録、學會、各官廳、會社、調査事項、仕方書の概要等を紹介)、參考文獻(邦文抄録、斷文抄譯、新刊紹介)、會員の頁(會員の消息、職業紹介、文獻資料の照會、會員の希望投書)、會報(會務報告)

3. 土木學會誌第 1 部は年 8 回、第 2 部は年 12 回發行とす。

第 2 部會第 6 回委員會 (昭 10・0・11)

出席者: 平山委員長, 阿曾沼, 井上, 河西, 金子, 兒

玉、田中、徳善、三浦、宮本、山口各委員、内田、金澤、鈴木、藤井各常議員、小野寺庶務主任

(1) 土木學會振興案を次記の通り全會一致を以て之を決定し役員會に提案することとする。

土木學會振興案

1. 規則「自第 10 條至第 20 條」を改正し従来の主任、主計、編輯長を廢し別表 I の如く仕事別に部を設け理事及常議員を各部責任者として部長及次長に配し必要に應じ幹事、専門委員を依頼し擔當の事業に就て畫策實行せしむること。

各部に於て差當り實行を希望する問題を參考途に別表 II に列舉せり。

2. 定款第 18 條を改正し常議員の定員を 20 名とすること。

常議員は各部の部長及次長として事業を遂行する重大なる責任を有する關係上、其の設備に就きては特に逸材本位に考慮すること。

3. 定款第 34 條を削除し名譽會員及前會長を以て別に諮問機關たる顧問會を設置することの條項を設くること。

別表 I

- 1. 總務部：講演、講習、政書、座談、討論、見學旅行等の講會會；他學協會（外國をも含む）との連絡；國際會議關係；土木關係者との管轄；他部に關する事項を擔當す。
- 2. 普及部：土木技術の宣傳紹介を擔當す。
- 3. 法制部：土木行政、土木教育の改革；法規の改正；土木技術者の任用範圍擴大を擔當す。
- 4. 調査部：學術、災害、用語等の調査；各種標準規格の制定；學術相談を擔當す。
- 5. 組織部：會員の増加；地方委員並に會員相互間の連絡；會員の職業紹介を擔當す。
- 6. 經理部：會計；事業資金の調達を擔當す。
- 7. 編輯部：會誌；諸出版を擔當す。
- 8. 庶務部（既設）

別表 II

- 1. 會員中より貴族院議員候補者を推薦すること。
- 2. 各種會議に於ける土木關係代表者には成る可く現職にある適任者を充てる様盡力すること。差當り被災豫防評議會に於ける故古市男爵の後任選定に際しては本主任に依ること。
- 3. 湖地委員會及資源局用講演會に土木學會代表の委員を參加せしむる様盡力すること。

4. 各種國際技術會議の消息を知る爲其の關係者（大體次の諸氏）に情報提出方を依頼すること。

・ 應用力學會議（山口 昇君）、動力會議（大塚島委員會）（神原信一郎君、吉田幸三君）、橋梁構造物會議（田中 豐君）、航海會議（鈴木雅次君）、道路會議（三浦七郎君、藤井眞透君）、鐵道會議（山田隆三君）、都市計畫會議（榎本寛之君）、材料試驗會議（近藤泰夫君）、國際測量會議（關 信雄君）

- 5. 國際會議に出席する會員に土木學會の代表を依頼し相當の援助を爲すこと。
- 6. 土木圖書館の設置を計畫盡力すること。
- 7. 外國土木關係學會と會誌交換の交渉を爲すこと。
- 8. 工業教育の改革に關する調査並に建議。
- 9. 藤原工科大学に土木工學科の設置實現方を盡力すること。

- 10. 土木立法制定を促進すること。
- 11. 土木省設置に關する調査並に建議。
- 12. 會計法改正に關する調査並に建議。
- 13. 災害防止に關する調査並に建議。
- 14. 土木工事取締規則に關する調査並に建議。
- 15. 労働者保護法の改正に關する調査並に建議。
- 16. 災害國庫補助に關する規定の調査並に建議。
- 17. 各種標準示方書の制定。
- 18. 標準工事契約書の制定。
- 19. 天災地變の際には即時調査觀察員を派遣し土木學會として活動し得る様準備し置くこと。
- 20. 會員相互規約（インデペンデント、チェック）の制定。
- 21. 會員社交機關の設置。
- 22. 基金運用に關する調査。

關西地方風水害調査委員會

第 1 回調査委員會（昭 10.9.20）

出席者： 平井副委員長、沼田（主任代理）、谷口、鈴木、三浦、井上、山岡（主任代理）、河田各主任、宮本幹事、小野寺庶務主任

協議事項

- (1) 調査報告書本濟分湖山、兵庫、奈良各縣及尼ヶ崎、鳥取、和歌山各市其他電氣關係に對し 10 月 5 日までに報告せられ度き旨各主任より督促することとする。
- (2) 各部調査報告書取調め方法に就き各主任の意見

を次回主査會に持ち寄り方針を決定することとす。

(3) 次回主査會を 10 月 1 日 (火曜日) 開催することとす。

第 2 回主査委員會 (昭 10・10・1)

出席者： 山田、谷口、鈴木、三浦、井上、野口、五十嵐 (代理)、河内各主査、宮本、青木各幹事、伊藤剛君、小野寺庶務主任

協議事項

調査報告書取纏め要領を次の如く協議決定せり。

- (1) 第 2 號表を要約し大體原因別に分類すること。
- (2) 各原因別に署名なる災害例を詳細記述 (同面、寫眞付) 其他之に類するものとして箇所名、被害延尺、金額等表示すること。
- (3) 上記第 2 號表要約の結果に基き線路別、府縣別、港湾別等にて第 1 號表 (總括表) を作製すること。
- (4) 上記總括表を取纏めて各部毎に總括表を作製すること。
- (5) 各部門毎に災害に関する總括意見を作ること。
- (6) 各部門別總括表を取纏め第 1 部にて全體の總括表を作製すること。
- (7) 第 1 部にて全體の災害に對する總括的意見を作ること。
- (8) 報告に添附すべき同面及寫眞は各部主査に於て選擇指定すること。
- (9) 各部毎に有給囑託 2 名位を置くこと。
- (10) 報告網鑑印刷等の爲には別に有給囑託を置くこと。
- (11) 各部主査よりの報告時期を昭和 10 年 11 月末日とすること。

維新以前日本土木史編纂委員會

第 31 回委員會 (昭 10・10・18)

出席者： 武田副委員長、小川、名井、茂庭、伴、安藝、板井、赤木、平井、吉川、佐藤、眞島、榎木、前川、那波の各委員、高柳光壽、栗原、渡邊各囑託、柴原書記長、小野寺庶務主任

本月の編纂事務其の他の報告を終り次の事項を協議せり。

- (1) 日本土木史寄贈先に當初の常議員も追加すること。
- (2) 交款目録を添書し各擔當委員へ廻送すること。

(3) 發刊の期、序文訂正のこと。

(4) 原稿未着分を取纏め整理すること。

(5) 印刷及校正に關しては充分注意すること。

日本工學會記事

昭和 10 年 9 月 10 日午後 4 時 30 分より日本工業俱樂部に於て日本工學會評議員會を開催し下記事項を決議せられ次で一般會務の報告並に懇談會ありたり。

- (1) 第 3 回工學會大會規則に關する件 (會報参照)
- (2) 文部省實業教育長判委員會諮問第 1 號特別委員長より原會に關する對策
- (3) 萬年會寄附工業奨励金支件者決定の件
- (4) 第 3 回工學會大會海外會員の參加勸誘方に關する件
- (5) モートル法反對運動對策に關する件

土木學會關西支部記事

昭和 10 年 9 月 16 日午後 5 時より中央電気俱樂部に於て第 5 回役員會を開催し支部長永井專三君外 12 名出席下記事項を協議せり。

- (1) 第 6 回土木工學研究會を 10 月 23 日より 3 日間開催のこと。
- (2) 秋季見學會を 10 月 6 日宇治川、イソの遊コース日歸りにて開催すること。
- (3) 庶務幹事高橋未治郎君轉任の爲の後任者として鮫島午吉君を依頼すること。

利根川流域水害狀況座談會

昭和 10 年 10 月 5 日土木學會會議室に於て利根川流域に於ける水害狀況を聴く座談會を開催し出席者 36 名にして別記記事 (彙報關 10 頁参照) の通り報告並に質問應答ありたり。

出席者： 辰馬東京土木出張所長、春木、池田、金澤、西田、青木、遠藤、櫻部、伊藤、立禪、金子、宮田、秋草、藤芳、山本の諸君

青山會長、内田、小野、加藤、藤井各常議員、中川、那波、名井、眞田各前會長、龜田、川口、永田、福田各編輯委員其他

會員 5000 名突破祝賀會

昭和 10 年 9 月 25 日午後 5 時 30 分より帝國鐵道協會に於て本學會々員 5000 名突破祝賀會を開催し出席者 100 餘名にして盛會を極む(會報参照)。

その他の記事

○昭和 10 年 9 月 10 日開催の日本工學會評議員會に於て第 3 回工學會大會副會長に本會々長 青山士君を推薦せられ之を受諾せり。

○昭和 10 年 9 月 13 日午後 5 時より理事會を開催せり。

出席者：青山會長，草間，平井兩副會長，古川主事，佐藤主計，藤井編輯長，平山第 2 部振興委員長，宮本，山口兩委員，野坂第 3 部振興委員長，原田，南保兩委員

(1) 秋季視察旅行開催の件，(2) 東亜部々長次長選任の件，(3) 入會勧誘の件，(4) 振興委員會第 2，第 3 部提案振興策の件等を協議せり。

○昭和 10 年 9 月 23 日午後 5 時より理事會を開催し青山會長外 5 名出席次の事項を協議せり。

(1) 第 2，第 3 部提案の振興策實施に關する件，(2) 振興委員會第 1 部會設置に關する件，(3) 服部報公會へ補助申請の件等

○昭和 10 年 9 月 23 日本會々員にして東洋工業會議に出席せらるゝ次の諸君に對し本會代表をも兼ね盡力方依頼せり。

内務省宮本武之輔君，鐵道省山田隆二君，九州帝大久野重一郎君，工政會松永 工君，滿鐵顧問加賀山學君

○旅順工科大学内に土木工學科設置に關し昭和 10 年 10 月 3 日丸之内會館に於て晚餐會を開催して意見の交換を爲し聯絡を探り促進に努力することゝす。

當日出席せられたる諸君次の如し

井上，俵，塚本，那波の旅順工科大学參議員，青山會長，草間，平山兩副會長，古川，佐藤，藤井，池邊，山田各常議員，古川，中川，眞田各前會長

○昭和 10 年 10 月 8 日コンクリート示方書改訂に關し野坂委員以下有志會員 8 名出席意見を交換せり。

○昭和 10 年 9 月 24 日土木學會誌第 21 卷第 9 號を發行成規の手續を了し 9 月 25 日全會員に配布せり。

○昭和 10 年 9 月 16 日までに下記諸君を入會並に轉格の手續を了し名簿に登録せり。

入 會 の 部

會 員

氏 名	勤 務 先	氏 名	勤 務 先	氏 名	勤 務 先
梅村喜三郎君	大阪鐵道局工務課	近 藤 博君	名古屋水道部擴張課	戸 谷 信 雄君	鐵道省建設局計畫課
遠 藤 忠 夫君	〃	佐 藤 英 吉君	北海道室蘭土木事務所	中 野 利 國君	大阪鐵道局工務課
是 石 登 君	大分縣廳土木課	竹 村 孝 君	大阪鐵道局工務課	神 尾 守 次君	都市計畫北海道地方委員會

准 員

安 部 忠 孝君	大連柳谷組	桑 原 芳 樹君	吳海軍建築部佐伯事務所	豊 川 寛 君	北海道釧路築港事務所
安 部 東 作君	東京市水道局擴張課	小 玉 末 松君	滿鐵本社計畫部	中 野 正 彦君	内務省滋賀國道改良事務所
伊 藤 勝 雄君	國道局哈爾濱地設處	後 町 徳 太 郎君	北海道路土木都河港課	林 正 直 君	大阪鐵道局工務課
市 川 市 次君	東京市水道局擴張課	近 藤 清 君	名古屋水道部擴張課	肥 後 信 俊君	醫務總局府交通局道路課
上 原 浩 君	新京滿鐵建設事務所	齋 藤 一 二君	徳島縣池田土木出張所	福 島 峰 夫君	千葉縣道路鋪設事務所
小 笠 原 豊 藏君	樺太廳土木課	坂 本 時 雄君	北海道釧路築港事務所	藤 井 博 君	樺太廳土木課
岡 本 貞 一君	靜岡縣静岡土木出張所	櫻 井 淳 一君	大阪鐵道局工務課	藤 原 正 一君	阪神電鐵會社工務課
尾 關 健 藏君	京城滿原組	澤 嶋 茂 吉君	〃	松 本 竹 一 郎君	青森縣三木土木出張野邊地設出所
奥 田 清 一君	大阪鐵道局工務課	菅 沼 三 男君	靜岡縣静岡土木出張所	三 浦 長 三君	北海道釧路築港事務所
鹿 毛 博 人君	滿洲鐵道局第一技術處	高 村 義 次君	大阪鐵道局工務課	宮 崎 秀 雄君	大阪市港灣部技術課
金 田 梅 吉君	東京市港灣部技術課	谷 口 源 八君	福岡市水道課	森 島 宗 太 郎君	大阪鐵道局工務課
黒 瀬 義 一君	滿洲鐵道局第一技術處	玉 山 清 作君	北海道功氣合	八 木 眞 策君	兵庫縣濱坂臨時土木出張所

山角定一君 名古屋市水道部擴張課
 山崎 俊君 大阪鐵道局工務課
 山本正巳君 吳海軍造船部佐伯事務所

吉武政俊君 熊本縣土木課
 吉富安郎君 滿鐵奉天保線局
 池田福正君 滿洲龍江省鐵道局南段出張所

福永政雄君 北海道陸田川土木事務所
 三山直吉君 名古屋市水道部擴張課

學 生 員

郡司次夫君 東京帝大
 篠原 清君 //

中川正雄君 日大工學部
 山元 悟君 政大工學部

田中彰一君 徳島高工
 山本隆治君 日大工學部

轉 格 の 部

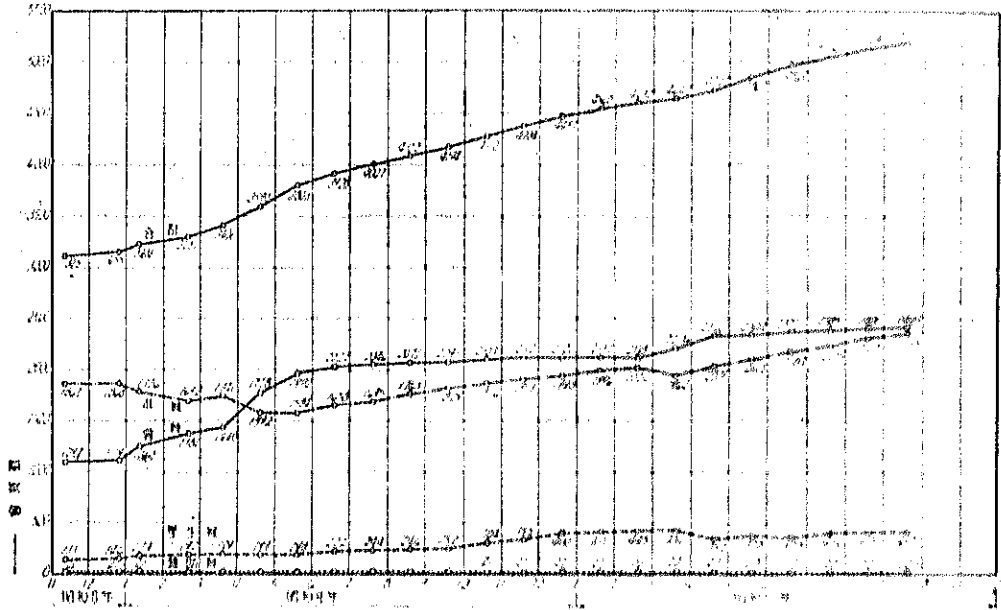
會 員

星 治雄君

准 員

小野早苗君 大島幸治君

會 員 移 動 一 覽 圖 表



○圖書及び雜誌 (昭和10年9月中)

交 換

日本鐵業會誌 第51卷 第60號	日本鐵業會	機械學會誌 第38卷 第231號	機械學會
衛生工業協會誌 第9卷 第8號	衛生工業協會	電氣學會雜誌 第55卷 第9册	電氣學會
水道協會雜誌 第38號 10年9月	水道協會	建築雜誌 第49册 第603號	建築學會
鐵と鋼 第21年 第8號	日本鐵鋼協會	建築業協會會報 第18卷 10年8月	建築業協會
港灣 第13卷 第9號	港灣協會	道路の改良 第17卷 第9號	道路改良會
都市問題 第21卷 第3號	東京市政調査會	建築と社會(商店建築)	日本建築協會
工業化學雜誌 第38卷 第0册	工業化學會	工 政 10年9月 185號	工 政 會
工業化學雜誌 (歐文別册) 第38卷 第0册	工業化學會	Proceeding vol. 61, No. 6.	American Society of civil Engineers.

日本建築士 地震観測報告 東大地震研究所 業務研究資料 滿洲建築雜誌	第17卷 第3號 9年 第4册 10年 第1册 第13號 第3册 第23卷 第25號 第15卷 第9號	日本建築士會 東大地震研究所 東大地震研究所 鐵道大臣官房研究所 滿洲建築協會	會 報 資 源 衛生工業協會誌 日本鑛業會誌 業務研究資料	第36卷 第9號 第5卷 第10號 第9卷 第9號 第51卷 第605號 第23卷 第26號	帝國鐵道協會 資 源 局 衛生工業協會 日本鑛業會 鐵道大臣官房研究所
--	--	---	---	--	---

寄 贈

朝鮮河川調査 年報 土木建築雜誌 工學院同窓會 ローマ字世界 風致協會の現況 瑞西國の溪流改修工事狀況 自動車の走行に適したる坂路に就て	昭和6年度 第14卷 第9號 第37卷 第9號 昭和10年8月 東京府 伊藤百世	朝鮮總督府內務局長 シビル社 工學院同窓會 ローマ字世界 東京府 伊藤百世	岡解力學 實用セメント學 應用力學 上卷 機械學會論文集 九大工學彙報 鐵道技術 造船協會雜纂 利 根 日立評論 京都帝國大學工學研究 工學部紀要 大橋圖書館 昭和9年度研究獎勵情況調査 エンジン 工學院同窓會誌 昭和8年度直轄工事年報 モネル・メタル及ニッケルの鍍金細工及仕上 Kモネルの加工及仕上 セメント工業 東京工業大學專報 滿洲技術協會誌 東京土木建 築業組合報 信 號	第3卷 第3號 第1卷 第3號 第10卷 第3號 第9卷 第10號 第162號10年9月 第1卷 第9號 第18卷 第9號 第5輯 第26回 年報 資 源 局 第14卷 8月號 第37卷 第10號 內務省土木局 日本ニッケル時報局 セメント工業社 東京工業大學 滿洲技術協會 東京土木建築業組合 信 號 會	平野正雄 西 畑 常 高橋逸夫 機 械 學 會 九州帝國大學工學部 鐵道技術社 造船協會 利根製作營業所 日立評論社 京大工學部中央實驗所 京大工學部 大橋圖書館 資 源 局 都市工學社 工學院同窓會 內務省土木局 日本ニッケル時報局 セメント工業社 東京工業大學 滿洲技術協會 東京土木建築業組合 信 號 會
日本ポルトランド・セメント同業會道路部 セメント界彙報	第930號 9月號				
滿洲技術協會誌 機械工學年鑑 工 學 工事畫報 鑄 物 氣象の研究と其の應用(藤原咲平講演) 國立公園 Excavating Photographie und Forschung Juli 1935 Heft 2.	第12卷 第77號 昭和10年版 No. 253 Sept. 1935 第11卷 第9號 第7卷 第9號 啓 明 會 第8卷 第9號 vol. 29, No. 8.	滿洲技術協會 機 械 學 會 東 京 工 學 社 工 事 畫 報 社 日 本 鑄 物 協 會 啓 明 會 國 立 公 園 協 會 三井物產機械部			
近世機械學 材料強弱學 材料強弱學(近世機械學第2卷) 渦卷ポンプ 近世機械學問題詳解 水 力 學	第1卷 力學 宮城音五郎 宮城音五郎 宮城音五郎 宮城音五郎 宮城音五郎 宮城音五郎				

購 入

Der Bauingenieur, August 1935, Heft 33~36.
Beton und Eisen, August 1935, Heft 16~17.

Engineering News-Record, August 1935, Vol. 115,
No. 6~9.
Die Bautechnik, September 1935, Heft 34~38.

會員 工學博士 笠井愛次郎君は昭和 10 年 9 月 25 日逝去せられたり、
本會は弔詞を靈前に呈し恭しく哀悼の意を表したり。

會員 上田政義君、永田庄吉君の訃報に接す、本會は恭しく
哀悼の意を表す。

會 報

第 21 卷 第 10 號 昭和 10 年 10 月

會員 5 000 名突破祝賀會記事

昭和 8 年に於て 3 100 餘名に過ぎなかつた我が土木學會員の数が、最近名實共に益々充實しつつある本會の姿を如實に示すものとして、昭和 10 年 9 月にはその數一躍して 5 200 餘名を數ふるに至つたので、この喜びを祝賀し併せて本會將來の隆盛を希ふ爲に 5 000 名突破の祝賀會が 9 月 25 日午後 6 時より鐵道協會に於て賑々しく開催された。本會は昨年創立 20 周年記念祝賀會を開催し今又この祝賀を開催されるに至つた事は會員各位と共に誠に喜びに耐えない次第である。開會に先立つて多數會員が何れも喜びに満ちた面持で參集し、參會者 105 名を數へた。午後 6 時大食堂にしつらへた食卓に就き歓談裡に食皿の數は進んだ。やがて青山會長立つて本日の祝賀會の御挨拶を述べられた。

青山會長挨拶 本會の會員が 5 000 名以上になりましたから、茲にいさゝか之が祝賀を致したいと思ひまして本日祝賀會を開催しました所、御多忙中斯くも多數御集り下さいました事は理事者として厚く御禮申上げる次第であります。祝賀會を開くに當りまして先づ簡単に會員増加に付ての経過と其現状とを申上まして、過去及び現在に於ける役員、常議員、各位の御努力及地方委員並に會員諸君の熱誠なる御協力御援助に對し滿腔の敬意と感謝とを表する次第であります。

會員の數は昭和 8 年に於ては 3 100 餘名に過ぎませんでしたでしたが、同 9 年には 4 200 餘名になり、更に今昭和 10 年 9 月現在で既に 5 200 名を突破する如き増加を見るに至りましたことは、本會を力附けること及び其存在をより廣くより強く又明にする事と御互に慶賀致す所であります。従つて収入金額も昭和 8 年度に於ては 51 000 餘圓（内會費 33 000 餘圓）同 9 年度に於ては 51 000 餘圓（内會費 34 000 餘圓）同 10 年度は未だ決算期に達して居ませんので正確な事は申述ぶることは出来ませんが、約 63 000 圓（内會費約 45 000 圓）位の収入の豫定であります。以上の通りでありますが茲に説明を要することは昭和 8 年度と同 9 年度の収入を見ますと總収入に於て同額、會費収入に於て約 1 000 圓の増加に過ぎませんのは、昭和 8 年度末に於て定款の改正を行ひ會費を低減入會金免除を致

しました結果であります。尙昭和 11 年度の豫算も目下作成準備中ではありますが、會員の數は昭和 9、10 兩年度の如き増加を見ることは出来ないと思ひます。而して又會員の増加した割合には収入は増加致しません。が多少は増加することではありますが故に、豫算を計上し得る範圍に於ては曩に決議せられました本會の振興策を漸次實行に移して來たのでありまして、其主なるものを擧げて見ますと、

會誌の内容改善、地方委員制度を設けて會員の募集、事務所の擴張、20 周年記念事業の實施、維新以前土木史の編纂發行、學會の仕事の一つとして東亞に於ける土木技術者間の相互の聯絡、向上及び親善の一助として東亞部の設置。

等でありまして、尙引續き振興委員會を設置して其處に於て計畫されたことを實行に移さんとしつゝあるのであります。

故古市本會初代會長は土木技術は技術中の將に將たるものであると申されました。實に左様であると存じます。凡ての技術を己の籠籠中に收め、夫れを以て土木と云ふ人類の此地球に顯れて以來其消へ失せて行く迄其生存及び幸福の爲に繼續するのであらう又進歩して行くべき土木技術の研鑽、進歩、實行を爲すべき使命を有する我々は土木學會と云ふ吾々の先驅者に依つて築かれたる地盤の上に地の利を得て居るのであります。夫れは地の利であつて人の和には及ばないのであります。我々は擴がらんことを望みます。然し同時に高きに達し又深きに至らなければなりません。我々は堅く團結することを必要と致す。然し擴り行かねばなりません。茲に大なる艱難があり工夫を要します。どうぞ各位は役員、常議員等を御援助御鞭撻被下ると同時に本會を御自分のものとして御愛護の上益其健全なる發達に御盡力あらんことを會員超 5 000 名の機會に皆様と共に祝賀すると同時に御願致します。

次に會員を代表して名井前會長が立ちにこやかに微笑みながら大要次の如く述べられた。“本日會員數 5 000 名突破の祝賀會が開催され、又昨年は創立 20 周年祝賀會が催されました事は本會の基礎が益々強固になり、本會の益々發展しつつあるを物語るもので誠に喜びに耐えない次第であります。之は先年設けられた振

興委員會の案によつて役員各位が非常な努力を注がれた事によるもので、役員及び委員各位の御盡力に厚く御禮を申し上げる次第であります。本會の創立當時私は主事をやり會計の方を持つてをりましたが、その當時は會員數も少く財政上非常な困難にありましたので、何とかして會員を殖さうと主事の名や編輯委員の名で案内状を出したり等致しました。然し會員數を殖す事は非常に困難な事でありまして、私としては創立當時を思ひ起し感慨に耐えない次第であります。本日會員數が 5000 名以上になつたとの事でありますが、尙増加する餘地があると思ひます、我々も會員諸氏と共に更に勸誘に盡力致したいと思ひます”。

次に會長の指名で 5 分間演説に移つた。先づ那波前會長が名非前會長に次いで昔の経験談をなされた後、“會の生命も丁度人間の生命の如く 20 年頃から態々活氣を増して来る様であるが、本會は丁度人間の 20 年代に當り元氣旺盛してゐる時であるからこの機を逸せず尙一層の奮發を爲し、本會をして益々盛ならしめたいと思ひます”と結ぶ。次に近衛三郎氏が“本會は今躍進の時であるから古きは改め、新しきを採るならば會員 1 萬を突破するは容易の事である”と述べられた。次に長らく支那に在られた加賀山學氏が本會への御無沙汰の挨拶をなし、“會員の數の多いと云ふ事は總てに於て効果を齎すものであつて、先程會長の述べられた如く總ての技術中の將に將たる者の集つた本會は數に於ても亦多くなければならぬと思ふ。今後數賀兩者の向上に努める様益々努力して、會員 1 萬突破の 1 日も早からん事を祈る次第であります。”と力強く述べられた。次に松浦四郎氏は學校を出てから氏が機會ある毎に常々叫んで來た事であるがと前提して、“技術者は技術の向上發展に努めるは勿論であるが、又社會上の地位を獲得する事が必要である。課長の椅子、部長の椅子は技術者に興へられねばならぬと云ふ事は私が常に叫んで來た事であるが、之は漸く認められてきたが、更に國家に對する功勞者たる技術者には此族院議員の椅子が興へられねばならぬと考へるのでありまして、この點に關し學會も考慮すべきであると思ふ。個人的に叫んでも効果が少ないから學會の名で團體の力で呼びたいと思ひます”。と叫ばれるや青山會長“そこで今晚は餘興に酬ひられざる人と云ふ映畫を御覽願ひまして酬ひられる様な人にして戴きたいのであります”。と述べ、たくみに本日の餘興の紹介に及

ぶ。次に今秋支那滿洲朝鮮各地に開催される東洋工業會議に列席される松水工氏がその經過を簡単に紹介された。時間も大分過ぎ後の餘興の時間に差支へるので盡きざる熱演を打ち切り、岡田竹五郎氏杯を上げ、土木學會の隆盛を祝福して萬歳を三回し杯を乾した。

食事が終り 7 時半から講堂に於て本日の餘興である内務技師金森誠之君原作脚色及び監督の映畫“酬ひられざる人”が公開された。映畫の筋は

或る河川水門工事の主任技師が日夜彼の心血を注いで工を進めてゐたが、或る日機械の故障修理中過つて負傷した。その夜旬日の降雨が遂に洪水となり、荒れ狂ふ水はその水門工事をも襲つた。技師は負傷せる身體を萬民保護の爲に投出し、洪水と闘つたが遂に堤防は破壊し今までの努力は水泡に歸した。剩さず洪水の爲にいともしき戀人まで奪はれ一時はがっかりしたが、然し技術者にはもつと大なる仕事のある事を思ひ、奮起して一意を急ぎ漸く水門落成の日は來た。そして落成式が花々しく開催され、式場には數多くの讃辭が山と積まれたが、然し技師の勞苦を諒へその努力に感謝する讃辭は一通もなかつた。

斯くして考へさせられた餘興を獲し祝賀會は 8 時半盛會裡に終了した。5000 名突破はうれしい。そして 1 萬名突破も纏ての日の事であらう。然しながら水の下の捨石となり、土の中の基礎となつて國家國民の爲に身命を賭して働いてゐる技術者に酬られた日の來るは何時の事であらう。本日の祝賀會はうれしい中にも本會の今後の進むべき途に何物かを暗示するものがあつた。

シヤムへ招聘された稻塚君よりの便り

(昭和 10. 8. 20. 附)

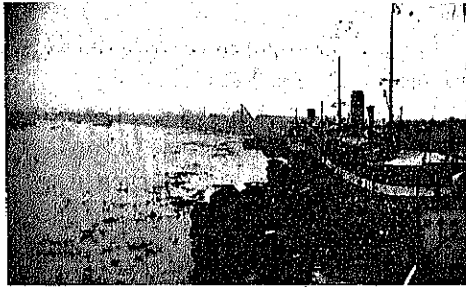
當地方は目下雨期で御承知の通り 1 日 1 回位午後になると大粒の雨が猛烈と降り、其の後は實に爽快を覺えます。雨期と云つても日本の梅雨とは異り、蒸暑きことはあまりなく、如何にも晴々としてをり、常にそよ風が吹き時には日本の秋に入りかけた頃の様な心地が致します。3, 4, 5 月頃が最も暑いとの事ですが、土地の人の話ではその暑さも戸外の直射日光の下では甚しく暑いが室内ではやはり風が吹き過ぎ易いとの事です。昨今私のホテルの室内の寒暖計は最高 06°-02° 最低 8°-8° 位です。

バンコックは人口 00 萬と云はれてゐますが、その大部分は支那人及び支那人とシヤムの雜種で、之等の

者が商賣上の實權を握つてゐます。市街地の道路は大部分舗装され、舗装の種類は大部分アスファルトで之も色々の種類が使用されてゐます。(シート・アスファルト、アスファルト・マカダム、トベカに類するもの等、エマルジョンも或る部分に用ひ結果良好との事)。この熱帯地に於ても相當の好成績を修めをるのを見て一驚した次第です。バンコックはメナム川の沈澱土砂の

第1圖 メナム川船着場

河水は赤褐色の濁流浮流するものは Water Hyacinth



照 10.7.21

上に来た都會にて標高は僅か 90 cm との事、基礎地盤は至つて悪く、道路の舗装基礎には從來テラフォーード基礎を以て入念に工事を致してをる様です。シャム灣は干満の差 2 m 位と思はれ、河口より上流 30 哩のこの地に於ても干満の back water の影響は 1 m 以上ある様に見受けられます。市内には運河多く、大貨物は總て運河に依つて輸送されてる状態で、市内交通機關は電車(單線 2 臺連結)、乗用自動車、バス、人力車(1 人乗、2 人乗)、人力自轉車(之は假に名附

第2圖 人力車

支那人車夫、左端 2 人乗



照 10.7. 末

けたもので、日本内地に於けるリヤカーを人力車の如く造り之に客を乗せ前にて自轉車を踏んで走るもの、之は全部 2 人乗) 等あり、日中歩行する事は相當苦痛の爲皆乗物を利用するもの如くです。電車、自動車

は噪音甚しく殊に自動車のラッパには閉口致します。住宅地は郊外にあり、交通は一般に不便で、相當家庭に於ては自家用自動車は必要品となつてゐます。乗用自動車の種類は實に種々雑多で小型のもの多く見受けられ、中でもフィアットが非常に多く、この地ではフィアットは好い方の部類に屬してゐます。

私共の勤務致してをる役所は内務省土木局道路課技術係とも云ふべき所で、英國で教育を受けたシャム人が係長をしてをります。道路課には役人約 140 名と臨時雇が多數(日給者)をり、技術者は主として測量の外業を爲し、その結果を持歸つて製圖を致してをります。1/5000 の preliminary survey を浮山行つてをります。日本の如く精密な 5 萬分の地圖は未だ出来てをりません。

役所は年中午前 9 時より午後 3 時迄で、日曜は休業です。役所では大部分の仕事は英語で出来ます。目下私共の仕事は新制定の荷重に因る各種鐵筋コンクリート構造物の今後施工さるべき standard の計畫で、從來の standard を全部之と取換へる筈です。新荷重とは我國の第 1 種荷重に似たもので、會議の結果軍用方面も考慮して定めたとの事です。シャムでは米突法を使用してゐますが、シャムの技術者は大抵英國仕込みであるから、英米の書物しか讀めず、然るに之等は單位が呎封度ですから、非常に不便を感じてをる様で、日本の書物が米突法である爲大いにうらやましがつてをります。

この國の文化設備は至つて不備でバンコックでさえ電燈、水道及び不完全ながら下水道もありますが瓦斯の設備がなく、燃料は一般に木炭を使用してをります。

第3圖 バンコック商店街



照 107. 末

バンコック以外の町では全く如斯文化設備はありません。目下北方ラオスの舊都たるチェンマイに上水道工

事を進めてをる由です。

この國の土木事業は從來バンコック市に屬する工事は總て佛人の手によつて行はれ、(之は兩國間に約束があつて、市の技術家は佛人以外は入れない事になつてをる由) 地方の工事は英人技師によつて成されたものなさうですが、2, 3年前之等外人は殆んど總て解雇し目下私共の課には伊太利人1人残つてあります。この人は20年もシャムに居るとの事で agreement の期限が切れて今は個人の資格で雇はれてをります。他は總てシャム人で、市の技術家としては佛人技師1人残存してをります。

當バンコック大學にも今年から土木科が獨立して設置され、スミス人、英人の教授が教鞭をとつてをります。

シャムは日本新聞紙上に見れば甚しく親日の様に見えてありますが、一般的には未だそうゆうわけではなく、多數の中には日本よりは寧ろ英國に好意を有する者もあり、一般に知識階級の者でも日本に對して至つて認識不足で彼等は日本を自國と同程度位に考へてをります。然し日本を最近訪れたものは皆1人残らず日本を禮讃してをり、私共に對しても非常に好意を寄せてをります。又當國內務大臣ルアン・プラジット氏は大の親日家で日本人には非常に好意を示し日本人ならば大抵の者には喜んで會ふとの事です。彼は私共當地に來て間もなく歐洲に旅立ち面談の機を逸しましたが、彼は佛英の視察を終へて最後の目的地たる日本を訪問致す筈であります。彼の日本訪問は將來の日暹關係に重大なる意義を齎すものと存じます。

私共は當地に参りましてから未だ日淺く、役所の様子も充分わかつてみませんが、何れその内に我々の實力を示して後色々の指導もしたいと兩人共大いに馬力をかけてをります。私共は日本技術名譽の爲に及ばず乍ら最善を盡して奮闘致す積りでをりますから今後共宜敷く御指導の程を御願ひ申します。

第3回工學會大會規則

第1章 會の名稱、時期及場所

第1條 本大會は之を第3回工學會大會と稱し昭和11年4月東京に於て之を開催す。

第2章 會の目的

第2條 本大會は東亞地方に於ける各國の工學及工業關係者協同して左に掲ぐる事項を遂行するを以て目

的とす。

1. 工學及工業に關する論文の發表及意見の交換を爲し以て智識を増進し且懇親を圖ること。
2. 發表の論文、意見並決議を記録して工學及工業に關する參考資料と爲すこと。

第3章 會議及施設

第3條 本大會は總會及部會の2種とし更に第2條の目的を達成する爲左の事業を行ふ。

見學、記録の出版、工業に關する展覽會、其他會議の目的達成に必要な事項

第4條 總會に於ては重要事項の審議及報告並會員より提出せられたる決議事項を審議す。

第5條 部會に於ては論文を發表し之に對する意見を交換す。

部會は發表せらるべき論文の種類に應じ適宜數箇に分類して之を設く。

第6條 見學は東京地方を主とす。但し海外より來朝の會員に對しては其の他の地方に涉り之を行ふことあるべし。

第7條 本大會に於て發表せられたる論文、意見、決議は之を刊行す。

第8條 展覽會は主として日本帝國內の工業に就き會期中適當の場所に之を開く。

第4章 會の執行機關の組織

第9條 本大會に會長、副會長、評議員、委員長、副委員長、委員及幹事を置く。

本大會に顧問を置くことを得。

第10條 會長は日本工學會理事長之に當る。

會長は本大會を統轄す。

第11條 副會長は日本工學會社員たる各學會々長之に當る。

副會長は會長を補佐し會長事故あるときは其の職務を代理す。

第12條 評議員は日本工學會評議員並日本工學會理事會に依り推薦せられたる者とす。

評議員は評議員會を組織し重要なる事項を審議す。

第13條 委員長は日本工學會理事會の決議に依り推薦せられたる者とす。

委員長は大會委員の事務を統轄す。

第14條 副委員長は日本工學會理事會の決議に依り推薦せられたる者とす。

副委員長は大會委員長を補佐し大會委員長事故あるときは其の職務を代理す。

第15條 委員は日本工學會理事長之を囑託す。

委員は講演、見學、展覽會、記録、會場、接待、晚餐會の區分に依り委員會を組織し本大會の計畫及實施に關する事項を分擔す。

第16條 各委員會には夫々主任を置き各委員會の事務を主裁す。

各委員會主任は夫々各委員會に於て選舉す。

第17條 各委員會主任を以て總務委員會を組織し大會委員長を以て之が委員長に充つ。

總務委員會に於ては各委員會の連絡及特に定めらるる事項を審議す。

第18條 幹事は日本工學會理事長之を囑託す。

幹事は本大會に關する庶務及會計を擔任す。

第19條 委員及幹事の職務を補佐する爲め事務員を置く。

事務員は日本工學會理事長之を囑託す。

第5章 會員の種類及資格

第20條 會員の種類を左の4種とす。

1. 代表、2. 名譽員、3. 正員、4. 客員

第21條 代表は各國の官衙、大學、専門學校、學會、協會、其の他の學術的諸機關の代表者とす。

大學、専門學校、學會、協會其の他の學術的諸機關の存在せざる國に在りては之に準ずべきものの推薦に係る者を以て代表と爲すことを得。

第22條 名譽員は本大會評議員會の決議に依り推薦せられたるものとす。

第23條 工學及工業に關係ある各國の諸學會協會其他學術的諸機關の會員にして參會の申込を爲したる者を正員とす。

前項の外參會の申込を爲したる者にして本大會總務委員會に於て前項會員に準ずるものと認めたる者は之を正員とす。

第24條 客員は本會より招待したる者並代表、名譽員又は正員の夫人及本大會總務委員會の餘銜を經たる同伴者とす。

第25條 代表、名譽員及正員は總會及部會に出席し其

の決議に加はり且見學其の他本會の各種施設に参加することを得。

客員は前項の會員と同一の待遇を受く。但決議に加はることを得ず。

第6章 論文の範圍及條件

第26條 本大會に提出すべき論文又は報告の範圍は工學及工業の總ての部門に涉り其の關係箇所の地域を限定せざるものとす。

第27條 論文又は報告は指定題目に依るものと任意題目に依るものと2種とす。

第28條 指定論文又は報告の題目は講演委員會に於て之を選定し任意題目に就き提出の論文又は報告は會議の目的に適合するや否やにつき講演委員會に於て之を審査す。

前項論文又は報告は日本語を以て記述するものとす。但し英語に依るを妨げず。

第29條 論文又は報告は講演委員會に於て審査の上左に掲ぐる方法の1に依り之を處理す。

1. 全部を發表す、2. 所論の要旨のみを發表す、3. 所論の項目のみを發表す。

前項發表の方法は總會又は部會に於ける朗讀若は演述の方法に依る。

第7章 論文題目の種別

第30條 論文又は報告題目の種別は左に掲ぐる25種とす。(題目省略會告参照)

第8章 用語

第31條 總會及部會に於て用ふべき國語は日本語とす。但し英語を使用するを妨げず。

第9章 會費

第32條 正員は參加會費として金5圓を支拂ふものとす。但し日本工學會の社員たる各學會の會員及海外より參加の會員は會費支拂を要せず。

第10章 細則

第33條 本規則に規定するものと外必要なる事項は細則を以て之を定む細則は總務委員會の決議を経て之を定む。

會 告

第 3 回工學會大會の論文募集

昭和 11 年 4 月上旬東京に於て第 3 回工學會大會が開催されますが、右大會に於て発表すべき論文の提出に關する注意が公表されましたから、次の注意と大會規則（會報欄参照）を参照の上多數會員の論文提出を希望致します。

論文提出に關する注意

1. 論文に關しては大會規則第 6 章参照のこと
2. 論文は成るべく 8000 語（英文による 8000 語の意味）以内たるべきこと
3. 同一人の提出し得べき論文數には制限なし
4. 論文提出希望者は昭和 11 年 1 月末日迄に其の題目及び梗概（成るべく英文とし 500 語以内たるべきこと）並講演所要時間其他映寫設備の要否等を日本工學會へ通知すること、但し日本工學會社員たる學會及び協會の會員は各其の所屬學會協會へ同日迄に通知のこと
5. 論文提出希望者は前項の通知以外其の論文の全文を昭和 11 年 2 月末日迄に日本工學會に提出すること
6. 日本工學會社員たる學會及び協會の會員は前條と同様各所屬學會及び協會へ提出のこと
7. 論文及び其の梗概には著者の姓名、住所、學位、稱號、職業及び所屬學會協會名を記載すること
8. 附圖は其儘縮寫し得る様墨書にて明瞭に認むべきこと
9. 寫眞は其儘複寫し得る様明瞭なるべきこと
9. Technical Programme に掲げたる種別は論文の範圍を大體示すに止まり必しも論文題目其のものを示す意味ならず

TECHNICAL PROGRAMME THE THIRD ENGINEERING CONGRESS TOKIO, APRIL, 1936

1. General Problems concerning Engineering :
Education, Administration, Statistics, Standardization, Scientific Management,
International Cooperation of Engineers, etc.
2. Engineering Science :
Strength of Materials, Thermodynamics, Hydraulics, Electricity and Magnetism and other Scientific Researches.

3. **Architecture and Structural Engineering :**
Architectural Designing, Architectural History, Housing Problem, Fire Protection, Framed Structure, Earthquake-Proof Construction, Bridge Engineering, Masoury Construction, Reinforced-Concrete Construction, Earth Problem, etc.
4. **Public Works :**
Harbour Engineering, River Engineering, Highway Engineering, Canals, Irrigation, Waterworks, Sewages, City Planning, etc.
5. **Railway Engineering :**
Location, Construction, Operation, Rolling Stocks, Machinery, Signalling and Safety Appliances, Electrification, Street Railway, etc.
6. **Transportation :**
Land, Water and Aerial Transportation, etc.
7. **Communication :**
Telegraph, Telephone, Wireless Telegraph and Telephone, Radio Broadcasting, Television, etc.
8. **Power :**
Resources, Waterpower Plant, Heatpower Plant, Transmission and Distribution, etc.
9. **Electrical Engineering :**
Generators and Motors, Transformers and Convertors, Measuring Instruments, Electric Switch Gears, Power Cables, Vacuum Tubes, Electrical Heating Appliances, etc.
10. **Illuminating Engineering :**
Light Sources, Illumination, Photometry, etc.
11. **Mechanical Engineering :**
Heat Engines and Boilers, Hydraulic Machinery, Pneumatic Machinery, Material Handling, Mechanism and Machine Design, etc.
12. **Machine Tools, Precision Machines and Instruments :**
Jigs and Gauges, Measuring Machines, Cutting Tools, Machines for Manufacturing, etc.
13. **Ordnance Engineering :**
Gun Construction, Fire Controlling Mechanism, Ballistics, Projectiles, Torpedoes, Mines, etc.
14. **Refrigerating Industry :**
Refrigerating Machinery, Refrigerating Plants, Insulation, Cold Storage, Ice-

- Making Industry, Transportation of Refrigerated Goods, etc.
15. Domestic and Sanitary Engineering :
Heating, Ventilating, Air Conditioning, Plumbing, etc.
 16. Textile Industry :
Raw Materials, Spinning, Silk Throwing, Weaving, Knitting, Finishing, Textile Machinery, etc.
 17. Shipbuilding and Marine Engineering :
Theoretical Naval Architecture, Construction of Ships, Rules and Regulations, Main and Auxiliary Machinery, Equipments of Shipbuilding Yards, Ship Equipments, Life-Saving Appliances, etc.
 18. Aeronautical Engineering :
Aerodynamics, Aeroplanes, Dirigibles, Air Propellers, Equipments, Instruments, etc.
 19. Automotive Engineering :
Chassis, Bodies, Automotive Engines, Motor Car Equipments, etc.
 20. Chemical Industry and Engineering :
Inorganic, Organic and Synthetic Chemical Industries, Electrochemical Industries, Chemical Engineering, etc.
 21. Fuels and Combustion Engineering :
Preparation of Fuels, Combustion Equipments, etc.
 22. Mining and Metallurgy :
Economic Geology, Mining, Dressing, Ferrous and Non-Ferrous Metallurgy, Metallurgical Technology, etc.
 23. Welding, Casting, Forging.
 24. Engineering Materials :
Iron and Steel, Metals and Alloys, Stone, Wood, Cement and Concrete, etc.
 25. Miscellaneous.

Note:—The Technical Programme indicates the scope of the subjects to be dealt with at the Congress, but not necessarily the titles of papers.

NOTICE

- (1) All papers shall not exceed 8 000 words in length. They shall be type-written with double spacing on one side of paper only. Two copies should be sent to the Secretary not later than January 31st, 1936.

- (2) No restriction is placed upon the number of papers from a single contributor.
- (3) All papers shall be accompanied with the abstracts in English with the authors' names and occupations.
- (4) Photographs should be clear prints suitable for reproduction without retouching.
- (5) Drawings and diagrams should be made with jet black ink on white papers. Lettering should be in plain block types. Special attention should be paid to reducing their size to suit that of paper.
- (6) All correspondence should be addressed to the SECRETARY, THE NIPPON KOGAKKAI, NIPPON KOGYO CLUB BUILDING, MARUNOUCHI, TOKIO.

會 告

會 員 名 簿 調 製 に 就 て

○昭和 10 年度本會々員名簿を作製するに當りまして、正確を期するため、登録名簿と一應照合致したいと思ひまして、9 月 30 日までに現住所、職業その他所定の事項を、従前の通り何等變更せられない場合でも、必ず御通知下さる様、會誌第 21 卷第 8 號會告にて御願ひ致しましたが、未だ通知せられない方は至急に御回報を願ひます。

○所定の通知用紙は會誌第 8 號に綴込んであります。

御 住 所 不 明 會 員 に 就 て 御 願 ひ

下記諸君は轉居先の御通知がないため、會誌の配布を始め、その他の諸通信が出来ませんのは、誠に遺憾であります。どうぞ知人の方は御手数敷恐れ入りますが、御本人に御注意下さるか、本會にその住所又は勤務先を御知らせ願ひます。

會 員

東 良 治君	荒川參太郎君	伊 東 祐 介君	稻 栗 鑰 吉君	木村眞一郎君	小林源次君
藤 増 楠君	千葉菊太郎君	張 惟 和君	陳 發 孫君	徳永泰夫君	宮永芳太郎君
中島健吉君	廣瀬宗直君	藤 原 讓君	丸 林 筑 郎君	村 田 清君	安西榮太郎君
山 本 格君	山 本 弘君	山本隆之助君			

會 員

和泉高巖君	池田乙次郎君 (舊名三郎)	池田角太郎君	石原三郎君	岩田正平君	巖 汝 誠君
小川彌一郎君	緒方政雄君	大岡繁 郎君	大森鶴吉君	楠崎景久君	片岡 健君
龜田 浩君	城内清太君	菊池三吉君	栗田忠治君	小林義雄君	佐藤興吉君
齋藤賢彦君	末永政雄君	關 佳 夫君	曾我 進君	田代岩平君	田所要吉君
田中武次君	多田安三郎君	高瀬太吉君	高橋明 郎君	武田忠 一郎君	谷 征 一郎君
徐 三 清君	坪井 基君	中野源太郎君	飯 波 高 一君	丹羽賢 稜君	西野清長君
野口金太郎君	武原官六君	濱崎清四郎君	平本源太郎君	藤村禮士君	福島 稔君 (舊名高長)
船橋貞一君	藤 斯 選君	水原譽文君	宮 田 肇君	村田勝次君	本橋三郎君
矢野周雄君	山屋茂夫君	山田政次郎君	横田清治君	吉金亮三君	吉田二徳君
吉 九 賢君	吉見胤隆君	劉 作 棧君			

土 木 工 學 論 文 抄 録 頒 布 に 就 て

○昭和 9 年 10 月本會に於て發刊致しました土木工學論文抄録の残部があります、御希望の方は御申出で下さい、3 圓 50 錢で頒布致します。

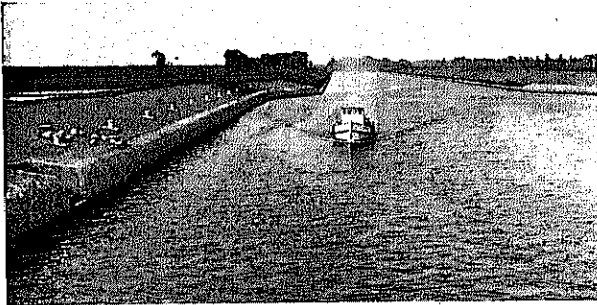
富山市富岩運河及神通川廢川敷宅地造成事業

(富山都市計畫事業)

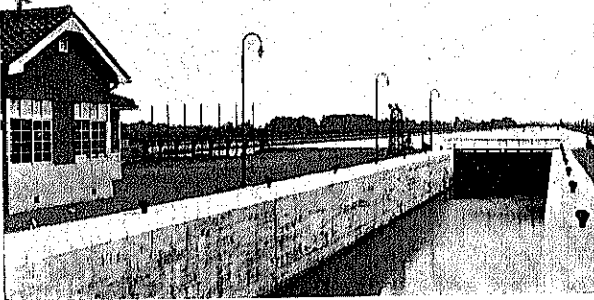
運河掘鑿中 (昭 5. 9.)



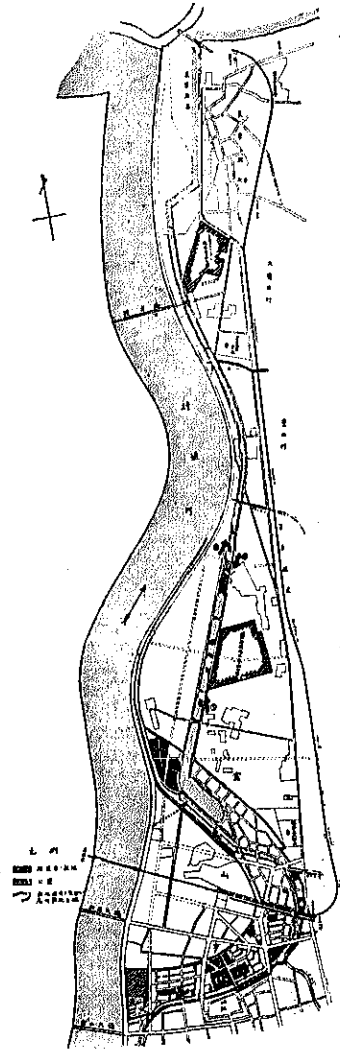
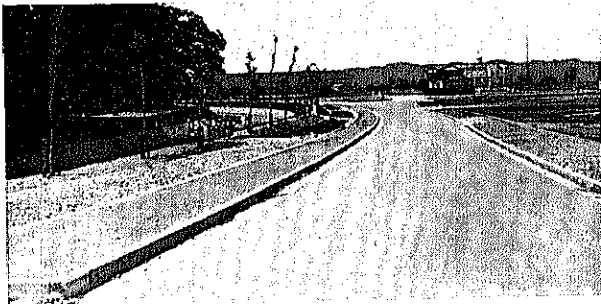
竣工せる富岩運河 (昭 10. 8)



中島開門 (昭 10. 8)



廢川敷に竣工せる都市計畫街路 (昭 10. 8)



富山都市計畫事業平面圖

神通川改修の結果生じたる面積 80 餘萬坪の廢川敷地に行つた宅地造成事業及び富山市とその外港東岩瀬港とを連絡する富岩運河事業の工事及竣工寫眞である。廢川敷の埋立土砂は運河の掘鑿土を利用した。運河の幅員は 60m 及 42m、水深は平均潮位下 2m、本事業は富山縣知事執行の都市計畫事業で昭和 3 年事業着手昭和 11 年 3 月落成の豫定。

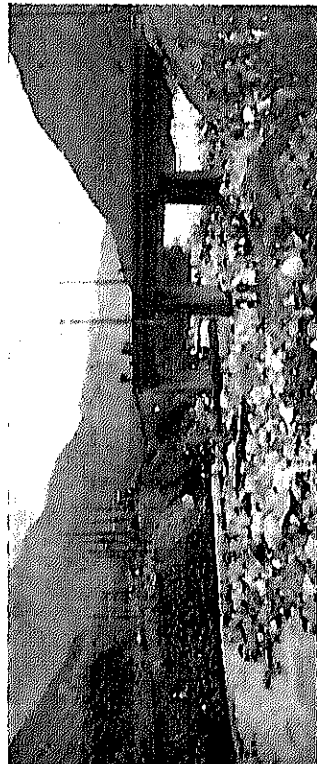
國有鐵道災害狀況

東海道本線蒲原由比閘波止に打當る激浪



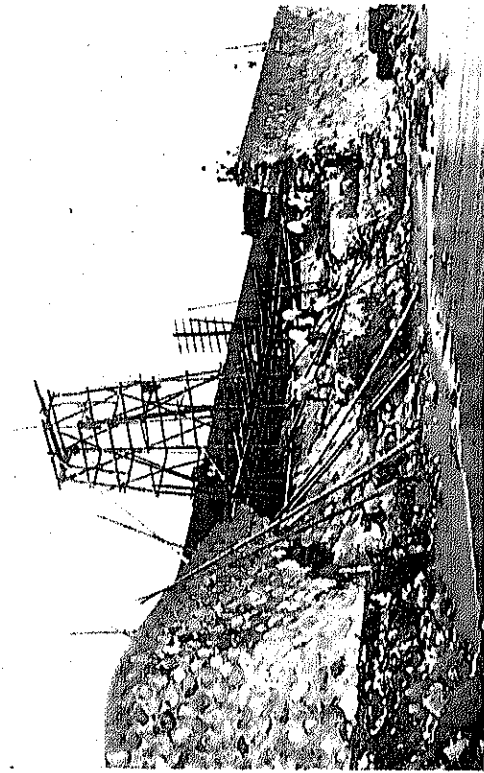
(昭10. 8. 25. 撮影)

上越線土合土俵間第一雄野川連梁撻折及橋臺流失(昭10. 9. 25發生)



魚野川急増水し北岡方板蓋致茶堤決潰し次で橋臺橋脚も遂に流失した
(昭10. 9. 27. 撮影)

應急工事中の狀況



(昭10. 9. 3. 撮影)

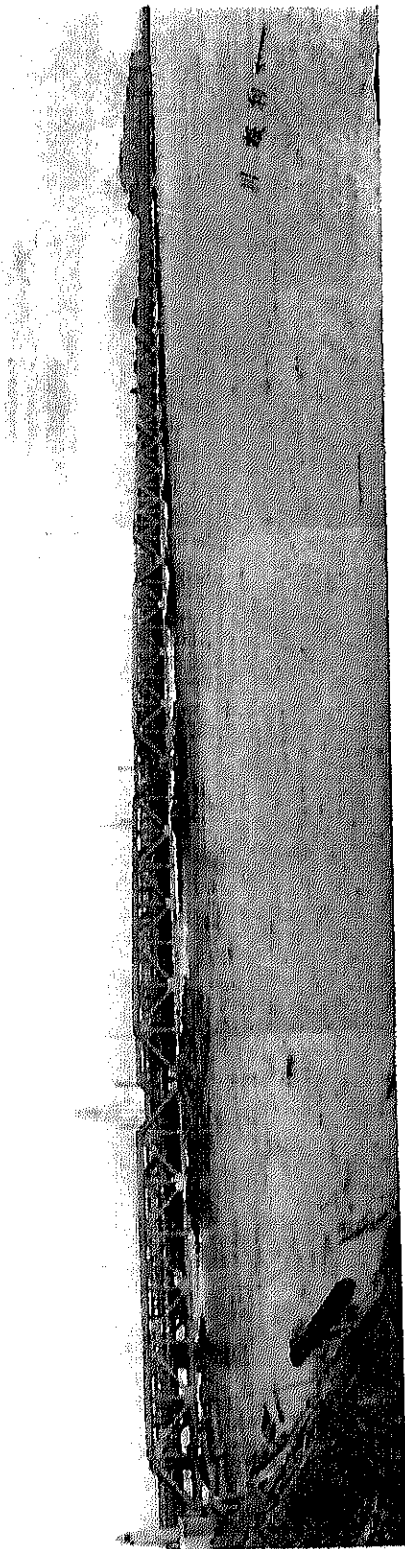
同左 假桁假設狀況



(昭10. 10. 2. 撮影)

利根川水害状況 (I)

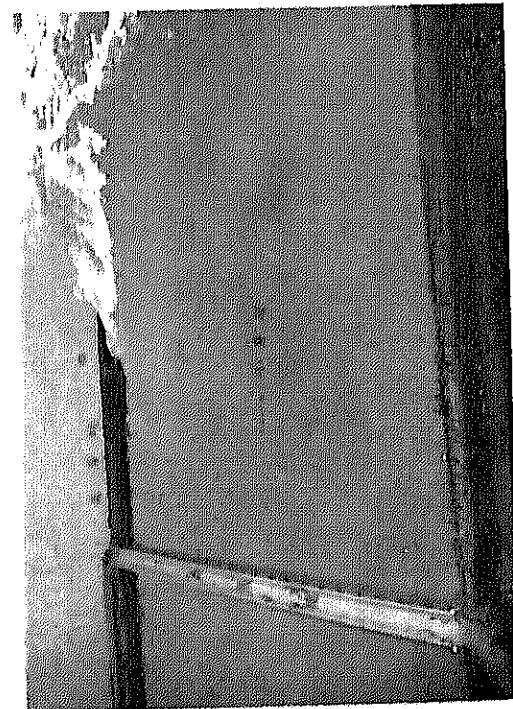
増水せる栗澤町利根川橋



江戸川鮎川岡村東金野井堤防の水防



小良川在野場沢渡箇所、茨城縣高城村



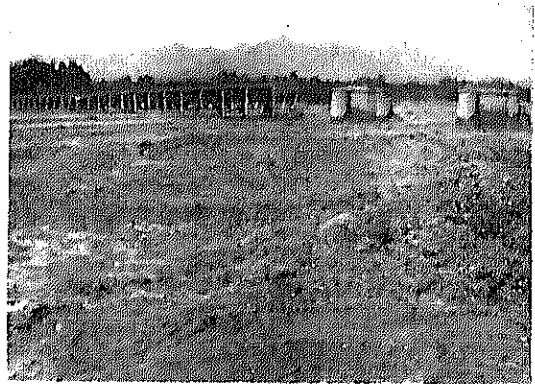
利根川水害状況 (2)

群馬縣室田町地内滑川筋縣道の破壊



(昭 10. 9. 20 撮影)

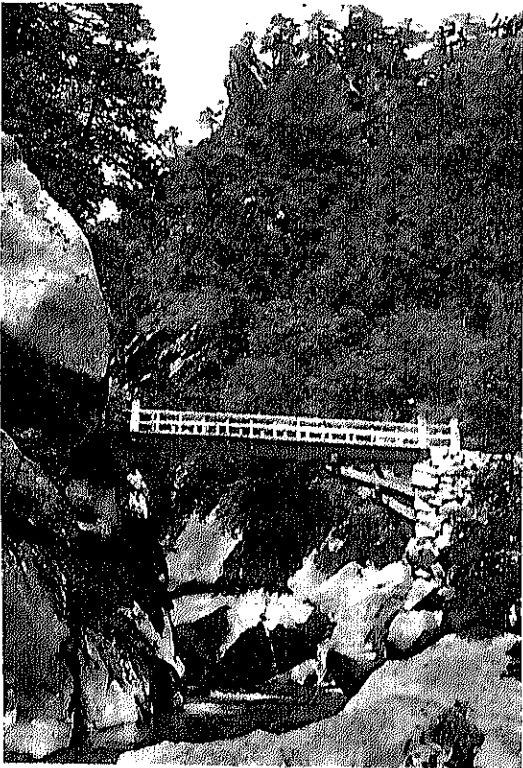
前橋市内利根川本流に架せる大渡橋流失



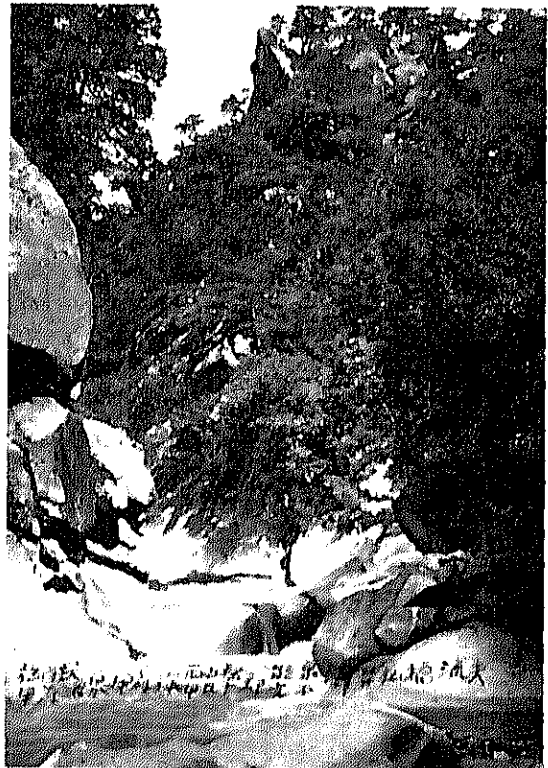
(昭 10. 9. 20 撮影)

山梨縣昇仙橋水害状況

災 害 前



災 害 後



會 告

圖書御寄贈の御願ひ

本會は本會所有の圖書雜誌を整理し、圖書室を設備致しましたが、現在所有の圖書は未だ充分とは云へませんから、會員の著書其他圖書雜誌は大小に拘らず學會宛御寄贈下さる様御願ひ致します。

圖書室及び娛樂室御利用に就て

本會所有の圖書及び雜誌は本會圖書室に備付けてありますから、下記時間内御隨意に御閲覧下さい。尚娛樂室には碁、將棋盤を備付けてありますから御利用を御願ひ致します。

自9月1日至12月31日

自7月21日

自1月1日至7月20日

自午前9時至午後8時

至8月31日

及土曜日自午前9時至午後4時

但し、日曜日及び祭日休。

徽章佩用に就て

本會の徽章は一般會員の方々に必ず佩用して頂く事に致してをります。講演會、見學會其他事務所御利用には徽章佩用を必要としますから、未だ佩用せられない方は至急御申出下さい。

1. 徽章の寸法 徑 14 mm
2. 品種 銀地金文字浮出し
3. 種類 詰襟服用と背廣服用の別あり
4. 實費 金 50 錢 (郵送の場合は外に留留郵便料 1 個に付金 13 錢を要す)



(直径 14)

寄稿に関する注意

1. 用紙: 成るべく本會の原稿用紙を使用され度し。原稿用紙は御請求次第御送り致します。
 2. 頁数: 頁数は本會の原稿用紙 180 枚 (本會誌 30 頁) 以内とされ度し。若し前記頁数を超過する場合は登載をお断りすることがあります。
 3. 文體: 文體は文章的口語體とす。本文に重要な関係のない前置、挨拶等は省く事。この方針に基き適當に字句の修整、短縮を行ふことがありますから御了承あり度し。
 4. 書體: 横書とし、假名は平假名、數字は算用數字、ローマ字は日本式ローマ字を使用され度し。数字は特に明瞭に認められ度し。例へば n と u , u と v , r と v , a と α , r と γ , d と δ , その他 C と c , K と k , O と o 等頭字と小字とを判然たらしむる事。
 5. 算式標準: (1) 本文文字間に挿入する算式は
例へば a/b と書き $\frac{a}{b}$ を避け、 $(a+b)/(c+d)$ と書き $\frac{a+b}{c+d}$ を避けること。
(2) 數字
數字は 3 桁毎に間隔をあげる事 名數は次の如く書き 括弧内の如く書くこと。例へば
95 錢 (三十五錢), 13.56 圓 (十三圓五十六錢), 1~4 時間 (一時間乃至四時間),
83 320 t (八萬八千三百二十六噸), 1935 年 1 月 1 日 (千九百三十五年一月一日),
m (米), m^3 (立方米), kg (尨), l (立), 83.4 尺 (八丈三尺四寸)
 6. 用語: 應用力學及コンクリート用語は工學會決定用語を使用され度し (應用力學用語は本誌第 19 卷第 5 號, コンクリート用語は第 20 卷第 6 號會告参照)。
コンクリートは片假名で記し漢字を用ひざること。
 7. 圖表: (1) 圖表には圖表題を記すこと。
(2) 複雑なる表の如きは成るべくグラフにて示す事。
(3) 圖面はその縮寫し得る様にトレーシング・ペーパー、オイル・ペーパー、トレーシング・クロス等とすること。
(4) 圖表は凡て墨色を用ひインキ類或は採色を施さざる事。
(5) 方眼紙は青罫のものを用ひ (黄色、赤色の罫は使用せざる事) 縦横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を描き置くこと。
(6) 圖表の文字、數字は特に大きく書かれ度し (縮寫の標準は $1/2 \sim 1/5$ 程度を以て縮寫後の文字の大きさを約 2mm 程度となる様され度し)。
(7) 圖表類は製版の都合上かなり汚損するものと豫め御含み下され度し。
 8. 寫眞: 寫眞は特に明瞭なるものを送られ度し。
 9. 其他: (1) 論說報告は邦文に限る。
(2) 論說報告には必ず冒頭に英文表題及び邦文要旨並に著者の職名及び勤務所名を添附され度し。
- 附記: (1) 論說報告、彙報、抄録及び工事寫眞にして掲載せる分には謝辭を呈します。
(2) 講演、論說報告の各欄に掲載の分には抜刷 20 部を寄稿者に贈呈致します。尙 20 部以上御希望の向には豫め御通知ある場合に限り實費にて御要求に應じます。